寮の門限に関するインフォーマルな集団規範の変動

— Return potential model を用いた継時的研究—

佐々木　薫

問　題

制度的集団に，フォーマルな諸過程とインフォーマルな諸過程を区別することは，すでに広く行われている。(注1) 本研究も集団の規範現象におけるフォーマルな過程とインフォーマルな過程との，この2重性に着目し，とくに後者に焦点を合せて分析を試みようとするものである。規範現象におけるこの2重性は，学校などのような，一般に何らかの教育訓練を目的とする制度的集団において，特に顕著であり，それがもつ実践的意義も大きい。なぜなら，教育的配慮をもってフォーマルに制定された諸規範（諸「規則」）がどれほどの実効をもち得るかは，そこに発展してくるインフォーマルな規範過程に大きく依存しているからである。インフォーマルな規範過程は，時として「規則」が意図する教育的効果を著しく減殺したり，場合によっては全く逆の効果を招来することさえある。インフォーマルな規範過程の解明は，実践的にも，また理論的にも重要なものと言わねばならない。

本研究は，フォーマルな規範過程とインフォーマルなそれとの対応関係を直接問題にしたものではない。方法論的には，ひとまず前者を一つの与件とみなし，後者が集団ないしは下位集団 subgroup の他の諸過程— たとえば，集団所属期間の増大，準拠集団 reference group の推移など—に影響されてどのように変動するかを検討することによって，インフォーマルな集団規範の形成過程を明らかにしようとしている。前者に対する後者の関係は，このような分析作業の中で，間接的にかつ部分的に考察されることになろう。

集団所属期間の増大によるインフォーマルな規範過程の変動については，先に行なった横断的 cross-sectional な研究 (6) がある。すなわち，全寮制をしている看護婦養成機関（高等看護学院）の全学生64名を対象に質問紙調査を実施して，寮の門限に関するインフォーマルな集団規範および学院生活の諸側面に対する態度その他を測定し，学年の上昇にともなって上記の規範が如何なる変動を示すかを検討した結果，①1年生から2年生にかけては，いっそう厳しい規範（わずかの遅刻をも厳しく罰すべしと要求する規範）が，いっそう安定した基礎（この規範に対する各成員の認知がいっそうよく一致し，かつ成員の私的見解によってよりよく支持されている）の上に形成されるが，②2年生から3年生にかけては，規範の厳しさは2年生時の水準に維持されつつも，その基礎は逆に不安定化の方向をたどること，そして，③このような変動は，学年の上昇にともなう，集団内地位の上昇，判断の独立性，集団離脱（卒業）を目前に控えた心理的動揺などを示唆する他の資料と関連づけて解釈できることが明らかになった。

この研究は，しかし，ある同一時点における各学年集団の横断的比較によるものであるから，一見「学年の上昇による変動」と思われるもののなかに，各集団のいわゆる「個性」が無視できない比重をもって混入している可能性がある。

本研究は，この点を縦断的 longitudinal な研究法を用いることによって補正しようという意図をもって着手された。研究の進展にともない，研

注1）もちろん，この区別の概念的明晰さに疑問を表明する論者（たとえば2）もいないわけではないが，たとえば，フォーマル・リーダーとインフォーマル・リーダーとの関係などのように，理論的にも実践的にも興味深い問題領域を指定する上で有用なものと言えるであろう。

究の目的もいくぶん拡張されるに至った。以下にそのような目的を明細化しておこう。

研究の目的：教育訓練を目的とする制度的集団（高等看護学院）の寮の門限に関するインフォーマルな規範過程が，時間的経過とともに示す変動を追跡する。この追跡によって次の諸点を検討する。

1）調査開始の時期が，たまたま，学生による寮の自主管理移行の時期と重なっていたので，上記の変動過程追跡は，この管理方式がインフォーマルな規範過程に及ぼす効果をも明らかにする手掛りを与えるであろう。その効果はどのようなものであろうか。

2）制度的には「学年の上昇」という形で規定される集団所属期間の増大，およびそれに附随する成員の諸変化が，これら学年的下位集団のインフォーマルな規範過程に及ぼす効果を明らかにする。先の研究（6）でみとめられた変動の規則性は，今回の縦断的ないし継時的研究によっても確認されるであろうか。

3）インフォーマルな規範過程を，集団成員からの期待に対する（回答者の側の）認知と，成員の行動に対する（回答者自身の）期待ないしは要求という2点から捉えようとするとき，両者の関係は規範の変動にともなってどのように変動するであろうか。この点を明らかにすることによって，インフォーマルな規範の形成過程におけるある種の基本的ダイナミックスが明らかにされよう。この問題は，集団規範の変動と成員個人の私的見解の変動とはどのように関係し合っているであろうか，と言い換えることができる。

調査の対象および方法

調査の対象は，福岡県北部の某国立病院附属高等看護学院に昭和39年度，40年度，41年度に在学した学生（全員女子）計113名である。この学院は，高等学校卒業生またはこれと同等の資格をもつ者の応募者中から，毎年春選抜試験によって20名ないし30名を選んで入学させ，これを1クラス—すなわち，1学年1クラス—として3年間看護婦となるための教育訓練を施す。学生は学院の課程終了時に国家試験を受け，看護婦の資格を得て卒業する。調査は上記各年度の在学生全員を対象にしたものを約1年間隔で3回，さらに最終年度の2年生のみを対象とした補足的調査を1回，都合4回行なった。各調査時における学生の在籍数は，第1表に示す通りであった。

学生は全員入学と同時に「学生寮」と呼ばれる寄宿舎に入り，卒業までの3年間をここで過ごす。寮は，学院当局の制定した寮則と，学生すなわち寮生が自主的に定め学院長（病院長が兼務）の承認を得て昭和39年4月に発効した寮則細則（以下，単に細則と略す）とに則って運営されている。寮則によって舎監1名（学院の教務員が兼務）が置かれているが，細則の発効以来，寮の管理運営は実質上学生たちの自治にゆだねられている。

第1表　調査対象および調査票回収状況

調査		1年生		2年生		3年生	
回	実施年月	在籍数	回収票数	在籍数	回収票数	在籍数	回収票数
Ⅰ	39.7	21	21	22	21	21	20
Ⅱ	40.7	27	27	21	20	22	21
Ⅲ	41.7	22	22	27	26	21	20
Ⅳ	42.2	—	—	27	27	—	—

本研究の主題をなしている寮の門限すなわち帰寮時刻その他に関する規定は，細則の中にある。要約して示せば次の如くである。平日の門限は4月—10月の間午後9時，11月—3月の間午後8時とされ，土曜，日曜，祭日はそれぞれ1時間遅い〔細則20条〕。時間外外出は舎監の許可を得，週番または寮長に届出なければならず〔細則22条〕，外出先での止むを得ない理由によって，定められた時刻までに帰寮できない場合は，速かに適当な方法で舎監に連絡し許可を受けなければならない〔細則24条〕。また，外泊の際は外泊簿に記入し舎監に提出して許可を受け，外泊手帳に外泊先で認印を受けてくる制度〔細則23条〕があったが，昭和40年度以降外泊手帳は廃止された。細則の諸規定が守られ，「円滑な寮生活が営まれるよう」3段階の罰が設けられている。第1度：補食室当番，第2度：補食室当番＋清掃当番，第3度：第2度＋補食室当番1週間〔細則40条〕とし，罰則は寮長がその権限によって課することができる〔細則41条〕。ただし，寮長は寮生中より公選される〔細則4条1項〕。実際には毎年秋に3年

生中より選出され1年間つとめる。4年生の後半は国家試験の受験準備のため忙しくなるからである。

調査は，質問紙法（無記名）により，学院の講義時間の1部を割いて，学年別に実施した。第1表に示す如く，各年度とも7月に全数調査を行ない，最終年度（昭和41年度）のみ，年度末（2月）に2年生の全員を対象に補足的調査を行なった。表中に見る如く，2年生および3年生の1部において1名の調査不参加者を出したが，いずれも一時的疾病その他の不可避的理由によるもので，調査内容に関連した特定の偏向を意味するものではない。因みに，これを調査票の回収率で表わせば，最も在籍数の少ないクラス(21名)の場合でも95.3%，22名のクラスで95.5%，最大の27名のクラスの場合96.3%，この他に100%の回収率を得た4クラスを含めて全体の率を算出してみれば，97.4%となる。このことは，この期間の全学院生を母集団と指定する限りにおいて，近似的に全数調査が達成されたみなしてよいこと，したがってその限りにおいては，推計学的検定を要しないことを意味する。もちろん，このような場合にも，結果の一般性を保証するために無限母集団を仮定して推計学的検定を適用する方法もあるが，今回は敢えてその方法を採らない。標本としての調査対象集団のサイズ，問題となっている現象の微妙さを考慮するとき，推計学的検定のもつ形式性によってあまりにも多くの観察が捨象されてしまうことを望まなかったからである。結果として，本研究は1つの事例研究たるに止まらざるを得ない。

質問票には，寮の門限に関する回答者自身の私的見解（以後，簡単に「私的見解」と略する）およびクラス成員に共有されていると認知される期待すなわちクラスのインフォーマルな集団規範（以後，簡単に「クラスの規範」と略称する）を測定する項目（末尾に掲げた質問票見本中，それぞれ質問18および19）のほかに，学院の正課および正課外の諸活動，将来に対する希望などに関する質問が含まれていた。初年度（昭39年）の調査に用いられた質問票は，次年度の調査時大幅に増補されたが，共通の項目は比較の便を考慮して敢えて訂正を加えなかった。初年度使用の質問票は先の研究報告(6)に掲載しておいたので，今回は次年度以降の調査で使用した質問票のみを末尾に掲げる。

以上の資料のほかに，上記質問紙調査最終回後約2年たって，調査対象年度中（昭和39年4月—昭和42年3月）に発生した寮則細則違反例，時間外外出の件数等を，学院当局ならびに寮生自治会の諒承のもとに，当時の記録から採取した。(注2)

なお，調査結果分析の種々の段階で，学院の教務員その他の方々から数々の情報や示唆を得たことは言うまでもない。

結　　果

分析結果は，規範過程そのものを直接取り扱った部分と，学院生活のその他の諸側面を取り扱った部分とに分けて，順次提示する。

A．規範過程の分析結果

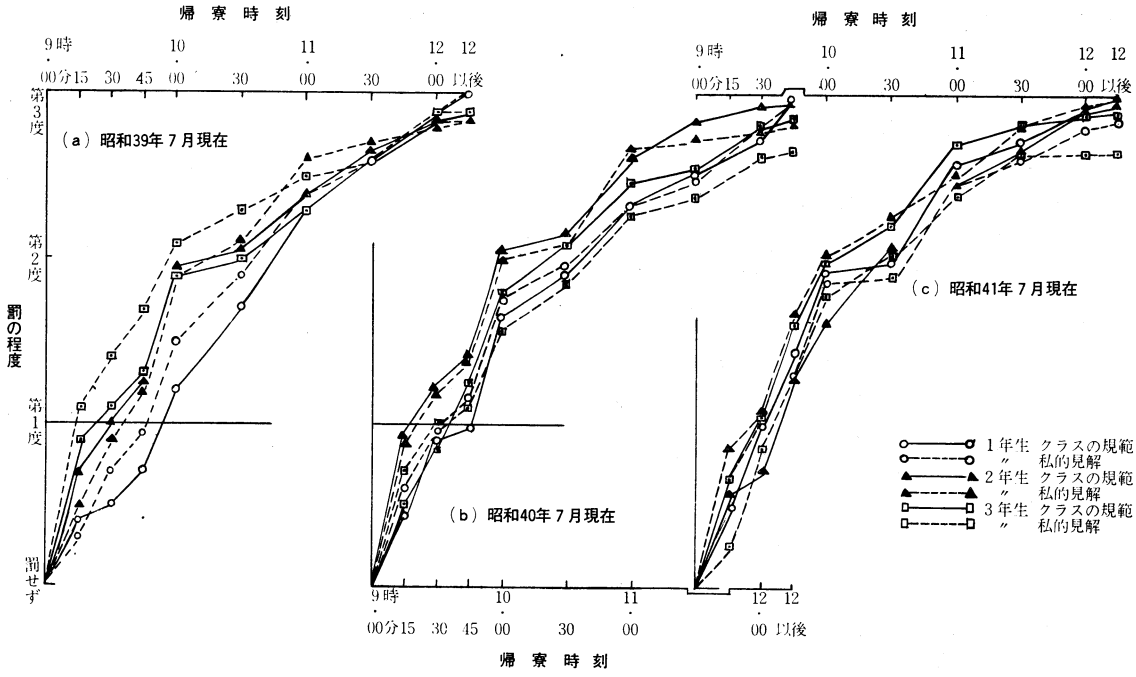
1）全般的推移—自主管理移行の効果

「もしあなたのクラスの人が平日に無断で外出し，次のような時刻に帰って来たとしたら，どの程度の罰を与えるのが適当だと思いますか。ただし，罰の程度は，第1度：補食室当番，第2度：補食室当番＋清掃当番，第3度：第2度＋補食室当番1週間とする（寮則細則第40条）」と訊き，午後9時15分，9時30分，9時45分，10時，10時30分，11時，11時30分，12時，12時を過ぎて，の各場合について回答を求めたものを各学年ごとに集計し，「罰しない」，「第1度」，「第2度」「第3度」の順にそれぞれ1，2，3，4のウエイトを与えて(注3)平均値を算出した。各場合ごとの平均値をグラフに目盛って線で結ぶと第1図に点線で示されている如き曲線が得られる。また，

注2）この作業は，事件関係者の匿名性を確保するため，学院の教務担当者と学生自治会の代表の手で進められた。研究の目的を諒解され協力を惜まれなかったこれらの方々に深甚の謝意を表する次第である。

注3）このウエイトづけは，これら各段階の罰の程がこのような数量によって表現されるような間隔尺度をなしているという保証は何もないという意味では，きわめて便宜的なものである。しかし，われわれの関心は学年間の差異に向けられている。そのような相対量を問題にする限りでは，この便宜的処置は必ずしも不当でない。

第1図　3調査時点におげる各学年の「クラスの規範」と私的見解



上の質問のあとをうけて，さらに「このことについてあなたのクラスの他の人たちはどう思っているでしょうか。全体的に考えて，もっとも多くの人が答えるだろうと思われるところを上と同じ要領で答えて下さい。」と求めたが，これにも先と同様の処理を施して，第1図に実線で描かれている曲線を得た。これらの曲線は，J. Jackson (3) が potential return curve と呼んだものに相当し，ここでは門限過ぎの帰寮に対して回答者たちが要求するあるいはクラスの大多数から期待されていると認知した罰の程度の分布を表わしている。前者を門限に関するクラスの平均的な私的見解あるいは単に「私的見解」と呼び，後者を門限に関するクラスのインフォーマルな集団規範あるいは単に「クラスの規範」と呼ぶことにする。(注4)

さて，第1図の(a)(b)(c)はそれぞれ，昭和39年7月，40年7月，41年7月に測定された各学年の「私的見解」(点線) と「クラスの規範」(実線) を表わしている。まず目につくのは，年を追って学年間の差が縮小していることであろう。これは「私的見解」についても「クラスの規範」についても当てはまる傾向である。昭和39年は寮生による寮の自主管理を推進する寮則細則が発効した年である。調査は，この細則発効（4月）後約4カ月を経過した時点（7月）を初回とし，以後1年間隔で2回目と3回目を実施したのであるから，この傾向は，少くとも部分的には，寮の自主管理移行の効果を反映しているものと思われる。もちろん，対照群を設けていないから，厳密な意味でその効果を立証することはできないが，理論的にはかなりよく説明のつく現象だと言えよう。すなわち，寮全体が共通の規則の下で1つの共同体として自主的に管理運営されるようになると，学年的サブグループ間の相互作用が促進され，これがサブグループの規範を一元化するのに寄与するものと解される。

2) 学年の上昇による規範過程の変動

はじめにグラフを読むための基本的な用語を設定しておかねばならない。Potential return 曲線

注4）このように呼ぶことの根拠については，佐々木（5）を参照されたい。なお，ここにいう「私的見解」「クラスの規範」は，R. Rommetveit（4）の用語にしたがえば，それぞれ sent norm と received norm に相当し，また，クラスで平均化される以前の前者は，M. Sherif（7）のいう individual norm に相当する。筆者は敢て前者を規範と呼ばない。その理由も先に論じた(5)。

によって表現される「クラスの規範」は，曲線上の任意の点からグラフの横軸に下した垂線が長いほど，したがって図の上方に描かれているほど「厳しい」と言える。なぜなら，それは，門限を過ぎた任意の時点における帰寮に対してより大きな罰（ないし否認）が期待されていることを意味するからである。逆に，図の下方に描かれた potential return 曲線ほど「寛やかな」規範を表わしているものと解される。いま同一クラスの平均的な「私的見解」と「クラスの規範」とを比較して，両者にズレがあるとすれば，これはクラスの成員が総体としてかくあるべしと実際に意志していることと，それに対する全般的な認知とが喰い違っていることを意味する。「私的見解」との間に大きなズレをもつ「クラスの規範」を，「虚構度」(注5) の大きい規範と呼ぶことにする。虚構度の大きい規範は，成員からの内面的同調を確保し難いこと，そしていずれ成員間の相互作用を通じて，「複数の無知」plural ignorance が解消し，全体的意志の所在が正確に認知されるに至れば，大きく変化する可能性をはらんでいるという点で，「不安定な」基礎の上に立つ規範だと言えよう。規範の虚構性に2種が区別される。すなわち，「過厳視」によるものと，「過寛視」によるものとである。前者は，平均的な私的見解よりも厳しいところに認知された規範に，また後者は私的見解より寛やかなところに認知された規範に含まれる虚構性である。これを図についてみれば，実線（クラスの規範）が点線（私的見解）より上方にズレているのが過厳視で，反対に下方へズレている場合が過寛視である。

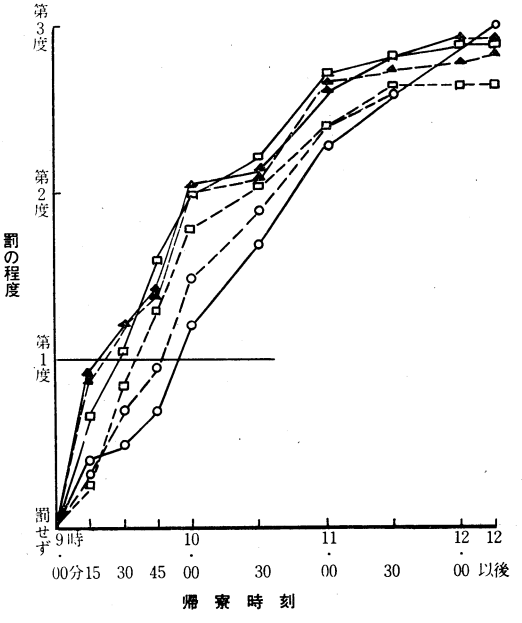
さて，学年の上昇にともなって，何らかの規則的な変動がみとめられるであろうか。先に言及した横断的研究 (**6**) は，初年度（昭和39年7月）の資料に基いたものであった。第1図(a)に見られる通り，次の諸点が指摘される。(1) 1年生は相対的に最も寛やかな水準にあって，なおクラスの規範を過寛視している。(2) 2年生は1年生より一段と厳しい水準において，虚構度のきわめて小さい規範をつくり上げている。(3) 3年生は2年生とほとんど同じ水準にクラスの規範を認知しているが，これをいちじるしく過寛視しているため，規範の虚構度は大きい。

これらの関係は，その後の調査資料によっても確認できるであろうか。第1図(b)昭和40年7月の資料および(c)昭和41年7月の資料についてみる限り，同型の関係は見出し難い。すでに見た通り，これらの資料は学年間の差をますます縮めている。そしてさらに方法論的に次のような難点をもっている。すなわち，構成員の異る学年集団の横断的比較には，学院の教務員たちが長年の経験からよく口にする「クラスの個性」が，学年差の中に介入してくる可能性が大きいことである。

クラスの個性差を消去して学年推移の実質的効果を浮き上らせる1つの方法は，縦断的分析であろう。

初年度の調査時に1年生であったクラスの学生（つまり昭和39年度入学生）については，2年生時，3年生時の資料が揃っている。これらの資料を前と同様の手続きによってグラフ化したものが第2図である。これを先の第1図(a)と比較してみると，3年生時の「私的見解」（点線）の示す位置関係が異るだけで，印象的差異の大きさにもか

第2図　昭和39年度入学生の3カ年間における通年変化

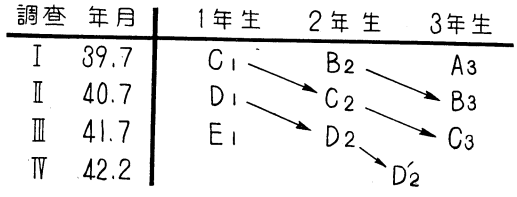


注5）R. Rommetveit（**4**）のnorm fictitiousness からこの用語を得た。ただし，norm の概念規定に関して若干相違があることは，先の論文（**5**）で詳しく論じておいた。

かわらず，他の曲線の相対的位置関係は全く同型であることに驚かされるであろう。先に第1図(a)についてみた3点のうち，(3)の「過寛視」を「過厳視」と置き換えるだけで，第2図に示された諸関係が敍述できるのである。とは言え，この際とくに注意すべきは，先に同時的差異の敍述であったものが，今や継時的変化の敍述になっているということである。この点を考慮して先の3点を書き改めれば次のようになる。(1)1年生時相対的に最も寛やかな水準にあってなお過寛視されていたクラスの規範は，2年生になると一段と厳しい水準へ移行し，同時に虚構度を著しく減少させる。(2)相対的に厳しい水準にあって虚構度の著しく小さかった2年生時の規範は，3年生になってもほぼ同じ厳しさの水準に止まるが，その虚構度は再び増大する。

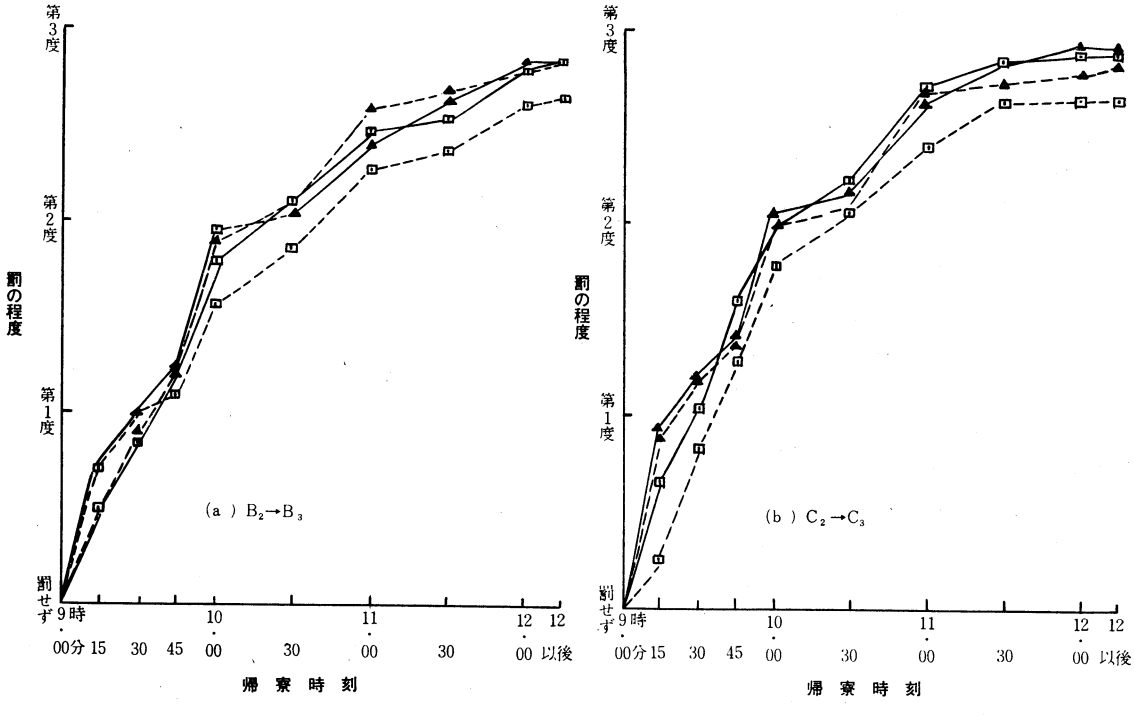
しかし，これとても昭和39年度入学生という1つのクラスがたどった推移にすぎない。さらに他の資料を用いてこの推移の一般性が検討されねばならない。4回の調査によって入手した資料の構造を図示すると，第3図の如くである。すなわち，AからEまで入学年度の異る5つのクラスが含まれていて，1年生から2年生への変化については，先に第2図でみた $C_1 \rightarrow C_2$ のほかに $D_1 \rightarrow D_2$ が，また2年生から3年生への変化については，$C_2 \rightarrow C_3$ のほかに $B_2 \rightarrow B_3$ がある。これらの資料について，上でみた規範過程の学年的推移の一般性を検討してみよう。

第3図　入手した資料の構造



図の説明：同一文字は同一クラスを示し，脇に付した小さい数字は学年を表わす。

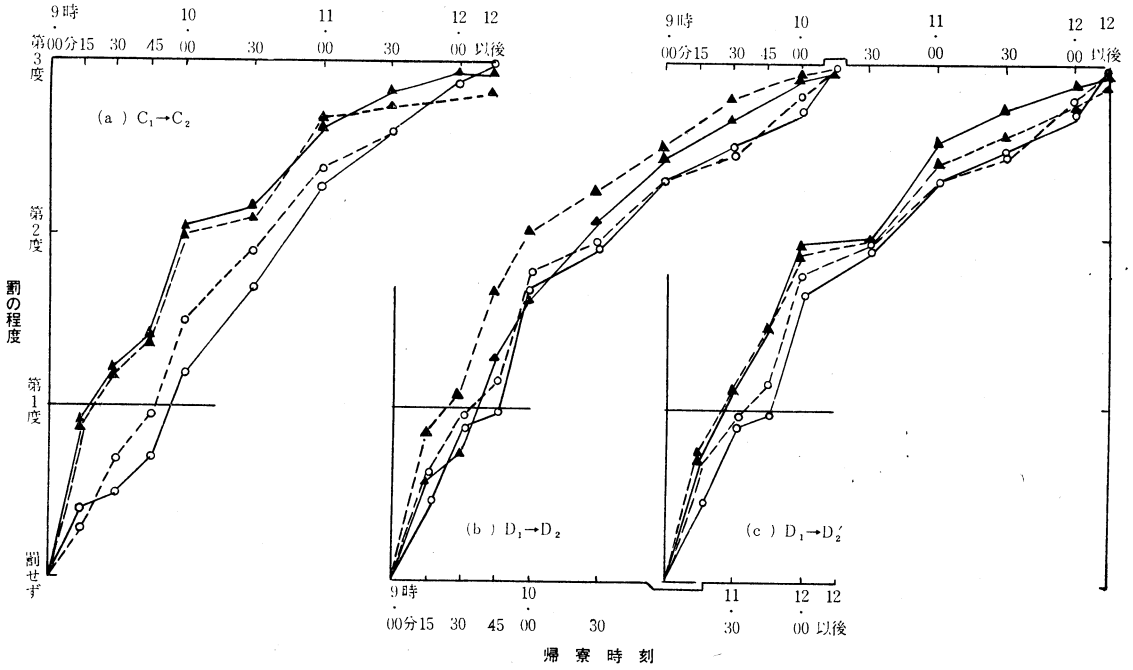
第4図　2年生から3年生への継時的変化



まず第4図(a)は，2年生→3年生の変化を $B_2 \rightarrow B_3$ についてみたものである。比較を容易にするため $C_2 \rightarrow C_3$ の変化を並べて示しておいた（第4図(b)）。9時15分と9時30分の3年生時「私的見解」にわずかな変則がみられるが，全体として $C_2 \rightarrow C_3$ の変化と同型である。つまり先の修正仮説(2)を支持しているとみなされる。

次に第5図は，$C_1 \rightarrow C_2$ と対比できるように描

第5図　1年生から2年生への継時的変化



かれた $D_1 \rightarrow D_2$ および $D_1 \rightarrow D_2'$ である。なお，D_2' は昭和42年2月，すなわち D_2 調査後約半年たって，このクラスのみを対象に行なった補足的調査の資料である。$D_1 \rightarrow D_2$ において（第5図(b)）は，2年生時の「クラスの規範」が未だ1年生時のそれとほぼ同一の水準に止まっているため，「私的見解」はすでに一段と厳しい水準へと移行しているにもかかわらず，先の修正仮説(1)にいう関係は見出せないが，$D_1 \rightarrow D_2'$ では，全般的に学年差が縮小しているにもかかわらず，$C_1 \rightarrow C_2$ とほぼ同型の変化を示している。このことは，クラスCが C_1 から C_2 までの1年間に達成した変化を，クラスDは D_1 から D_2' までの約1年半をかけて達成したことを表わしている。先の修正仮説で用いられている「1年生」「2年生」「3年生」などの時期区分は，この意味からすれば，字義通りの学年を指すというより，むしろ在学全期間中の初期・中期・後期とでも称すべき時期の相対的順序関係を指定しているにすぎないとみるべきであろう。先の修正仮説(1)はそのような意味において支持されている。

因みに，修正仮説(1)にいう変化をとげるのに，クラスDはなぜクラスCより長い時間を要したか，という疑問に対しては，クラスのサイズの相違を指摘することができるように思われる。(注6) 第1表に見る如く，クラスCは21名であるのに，クラスDは27名である。これは理論的にも興味深いことである。

さてここで，3年生時における虚構度の増大という現象について検討しておきたい。われわれの資料によれば，3例中2例が過厳視の方向に，残りの1例が過寛視の方向に虚構度を増大させている。これだけの資料からは，どちらの方向をとるのが一般的であるかは判断できない。学院の教務

注6）この点は，学院の教務員によって指摘された。クラスDのサイズが例年になく大きかったことは，種々の経験を通じて教務員たちに強く意識されていたらしい。

員たちによれば，クラスにはそれぞれの個性があると同時に，それらが相互作用をなしているという。たとえば，非常に厳しい上級生が卒業したあとには，これに反発した次年度の3年生が寛やかな見解に傾くなどである。そうだとすれば，所与の3年生が過寛視に進むか過厳視に進むかは，そのクラス固有の傾向と，それが置かれている周囲の状況と，さらに両者間の交互作用という複雑な諸要因によって決まるということになる。しかし，いずれの方向を取るにせよ，3年生時に虚構度が増大するという傾向には一般性を認めてよいように思われる。このことは規範の結晶度に関する次の資料と関連づけることによって，いっそうよく確証される。

これまで検討してきた曲線は，クラスの平均を基にして描かれていた。学生個々人の実際の回答は，この平均の周囲に分布している。この分布の散らばり具合は，統計学でいう分散 σ^2 を用いて量的に表現することができる。この値が大きいほどクラス成員の回答がマチマチであること，逆に小さいほどよく一致していることが意味される。この値を，9時15分，9時30分…12時以後の各帰寮時刻ごとに算出し，それらを合計した値を，規範の「結晶度」と呼ぶことにして（「私的見解」に関して同様の手続きで算出された値は，見解の「一致度」と呼んで，便宜上これを区別する），クラス別調査時別に比較してみると第2表の如くなる。規範の結晶度は，1年生→2年生へと高まり（値が小さいほど結晶度が高いことを意味する），2年生→3年生で再び低下することが読みとれる。ここでも D_2 は例外的な値を示しているが，D_2' との関係でみれば，変化がいくらか遅延したものとして理解できる。これは先に規範の虚構性について指摘したこのクラスの動向とよく一致している。

第2表　各クラスの規範の結晶度（σ^2）

調査	1年生	2年生	3年生
Ⅰ	C_1 2.29	B_2 1.83	A_3 2.52
Ⅱ	D_1 2.73	C_2 1.92	B_3 3.68
Ⅲ	E_1 2.19	D_2 3.29	C_3 3.34
Ⅳ		D_2' 2.31	

以上を要約すれば，学年の推移によるクラス規範の変化には一定の規則がみとめられる。すなわち，(1) 1年生時相対的に最も寛やかな水準にあって，しかもなお過寛視されていたクラスの規範は，2年生になって一段と厳しい水準へ移行し，同時に虚構度を著しく減少させる。(2)相対的に厳しい水準にあって極小の虚構度に達した2年生時の規範は，3年生になっても厳しさの水準にはほとんど変化がみられないが，虚構度は再び増大する。(3)規範の結晶度は，1年生から2年生へと高くなり，2年生から3年生にかけて再び低下する。この変化は虚構度の変化と軌を同じくしている。

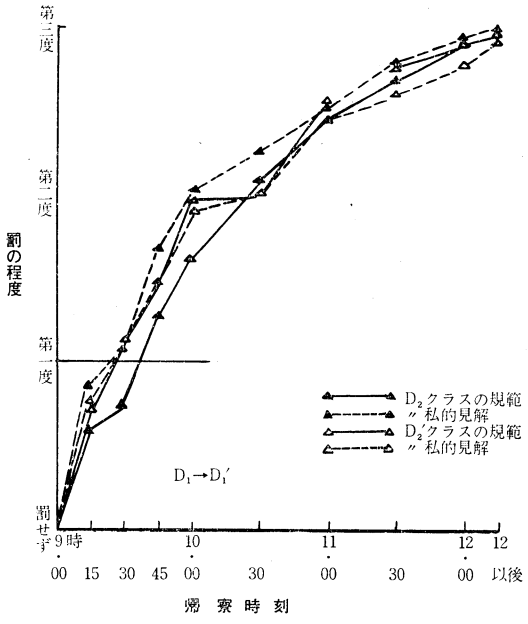
3）私的見解とクラスの規範との関係

第5図(a)と(b)との比較は，規範の変動に関する興味深い事実を示唆している。クラスDの規範は，D_2の調査時点において，その1年前のD_1時点とほとんど変わっていない。（11時から12時の間でわずかばかり厳しい水準への移行がみられる程度である。）ところが「私的見解」の方はすでに D_1 の時点で当時の「規範」よりいくぶん厳しい水準にあったものが，D_2 時点で一段と厳しい水準へ移行しているのがみとめられる。一方クラスCにおいては，C_2時点で「私的見解」「規範」ともに一段と厳しい水準へ移行している。第3回調査までの資料分析から，このような関係が見出された時次のような作業仮説が立てられ，その結果としてD_2'時点での補足的調査が企画されたのである。すなわち，学年の上昇にともなう諸変化が，ここで取扱っているような規範過程に一定の影響を及ぼすものとすれば，その影響はまず「私的見解」に現われ，ついで「クラスの規範」に現われて来るであろう。なぜなら，「私的見解」の変化がクラス成員相互に共通のものとして認知され，周知の事実となるまでには時間が必要だからである。そうだとすれば，D_2 に見られる「私的見解」と「クラスの規範」の関係は，C_1とC_2に見られるそれらの関係の中間段階にあるものと考えることができる。つまり D_2 においては，1年生→2年生への変化の影響が「私的見解」にのみ現われ，未だ「クラスの規範」に現われるに至っていない状態が捉えられているものと解されたのである。かくて，D_2 の約半年後，予想された

通りのD_2'が得られた。すなわち，D_2'において「クラスの規範」は，かってのD2の「私的見解」が位置していた水準に向って移行していること，そしてその結果，C_2 と同様に虚構度を著しく縮小していることが見出されたのである。

このような結果は，「クラスの規範」の水準移行がクラスの平均的な「私的見解」の水準移行に先導されるものであることを物語っている。第6図は，第5図(b)および(c)からそれぞれD_2 および

第6図　昭和40年度入学生の昭和41年7月から昭和42年2月への変化



D_2'を抜き取って$D_2 \rightarrow D_2'$の形にまとめたものである。この図によれば，「クラスの規範」がD_2'時においてようやくD_2時の「私的見解」の水準に達したときD_2'時の「私的見解」は遅い帰寮時刻に関する部分から逆に厳しさの水準を低下させつつある過程がうかがえる。他の資料との関係からみて，これは3年生時における虚構度増大への過程がすでに始まっているものと解することができる。このようにみてくると，前にみた1年生時における過寛視という一般的現象も，実は2年生時の規範への移行の始動状態と解することができるのである。

ここで次の疑問が生じる。クラスの平均的な

第3表　私的見解の一致度(σ^2)

調査	1年生	2年生	3年生
Ⅰ	C_1 2.48	B_2 2.33	A_3 3.29
Ⅱ	D_1 2.50	C_2 2.43	B_3 4.51
Ⅲ	E_1 3.95	D_2 2.82	C_3 6.08
Ⅳ		D_2' 3.19	

「私的見解」の水準移行は無条件に「クラスの規範」の水準移行をもたらすであろうか。たとえばC_3 にみられる「私的見解」の水準下降は，半年余の後に予定されている卒業式以前に,「クラスの規範」の水準下降をもたらすであろうか。残念ながら，卒業式直前の調査資料がないので，この点を直接テストすることは不可能であるが，否定的な解答を予想させる間接的な資料はある。第3表がそれである。この表の数字は，さきに第2表でクラスの規範の結晶度を算出したのと同じ手続にしたがって出した，「私的見解」の一致度を表わす数値（σ^2）である。値が大きいほど一致度の低いことを表わす。これによると，C_3 のみならず，一般に3年生時の一致度はきわめて低い。先に$D_2 \rightarrow D_2'$ の変化についてみたように「私的見解」が「規範」の移行をもたらすには，ある高さの一致度を達成していなければならないように思われる。D_2における「私的見解」は2.82の一致度を達成しているが，C_3におけるそれは6.08である。前者がこのように高い一致度をもって約半年後にD_2'の「規範」移行を得たことを考えるとき，後者がこのように低い一致度をもってほぼ同じ期間内に同様の「規範」移行を達成できる確率はきわめて小さいと言わねばならない。

これを要するに，この種のインフォーマルな集団規範の変動は，集団成員たちの私的見解がかなり一致して変動したとき，いくらかこれに遅れて生じる，と結論してよいであろう。

B．学院生活の諸側面に関する資料の分析

1）楽しいこと　「今の生活で一番楽しいことはどんなことですか。」（質問2）という問いに対する自由回答を(a)学友たちとの共同生活の中で得られる楽しみ—たとえば，「夜みんなとおしゃべりすること」「クラブ活動」「みんな（寮生）とピクニックや山登りすること」など，(b)独りで見出す楽しみ—たとえば，「帰省」「読書」「寝る

第4表　今の生活で一番楽しいこと
（クラス別にみた十分率の学年的推移）

クラス	1年生時	2年生時	3年生時
(a)共同生活の中で得られる楽しみ			
B		7.0 →	1.9
C	7.0 →	6.1 →	4.4
D〔D′〕	5.2 →	2.4〔3.2〕	
(b)独りで見出す楽しみ			
D		4.0 →	6.9
C	2.5 →	2.8 →	3.1
D〔D′〕	3.5 →	4.0〔4.1〕	

こと」など，(c)その他に分類して学年的推移をみると，第4表の如くなる。一般に(a)は学年の上昇につれて減少し，(b)は増加する。(c)には一定の傾向がみとめられない。(注7)

2）全寮制について　「学院の全寮制〔学生は全員寮に入らなければならないという制度〕についてどう思いますか。」（質問16）と訊いた結果は，2年生→3年生の変化にのみ一定の傾向がみとめられた。第5表に示すごとく，3年生時に否定的反応がふえている。

3）寮の運営に対する評価　「寮はうまく運営されていると思いますか。」（質問20）という問いは，第1回調査には含まれておらず，第2回調査以後追加されたものであるが，入手できた資料は一貫して，上学年ほど否定的評価が多いことを示している（第6表）。

第5表　学院の全寮制〔学生は全員寮に入らなければならないという制度〕についてどう思いますか（質問16）

クラス	反応	2年生時	3年生時
B	1. 全寮制がよい	9.5%(2)	14.2%(3)
	2. 特に通学を希望する者以外なるべく寮に…	66.7 (14)	42.9 (9)
	3. 通学が困難な者にだけ寮を…	23.8 (5)	42.9 (9)
	計	100.0 (21)	100.0 (21)
C	1. 全寮制がよい	55.0 (11)	55.0 (11)
	2. 特に通学を希望する者以外なるべく寮に…	25.0 (5)	15.0 (3)
	3. 通学が困難な者にだけ寮を…	20.0 (4)	30.0 (6)
	計	100.0 (20)	100.0 (20)

第6表　寮はうまく運営されていると思いますか（質問20）

調査	反応	1年生	2年生	3年生
Ⅱ	1. 非常にうまく運営されている	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)
	2. かなりうまく運営されている	59.2 (16)	20.0 (4)	9.5 (2)
	3. まあまあというところ	37.1 (10)	80.0 (16)	90.5 (19)
	4. どうもまずく運営されている	3.7 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)
	5. 非常にまずく運営されている	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
	計	100.0 (27)	100.0 (20)	100.0 (21)
Ⅲ	1. 非常にうまく運営されている	18.3 (4)	0.0 (0)〔 0.0 (0)〕*	0.0 (0)
	2. かなりうまく運営されている	59.1 (3)	69.3 (18)〔 44.4 (12)〕	45.0 (9)
	3. まあまあというところ	22.6 (5)	26.9 (7)〔 52.9 (14)〕	50.0 (10)
	4. どうもまずく運営されている	0.0 (0)	3.8 (1)〔 3.7 (1)〕	0.0 (0)
	5. 非常にまずく運営されている	0.0 (0)	0.0 (0)〔 0.0 (0)〕	5.0 (1)
	計	100.0 (22)	100.0 (26)〔100.0 (27)〕	100.0 (20)

＊〔　〕内はD_2'の資料

注7）これはさらに（c1）専門的訓練の中に見出す楽しみ—たとえば，「新しい技術を理解した時」「実習」「患者さんに感謝されたとき」など，と（c2）(a)か(b)か不明のもの—たとえば「土，日曜に外へ出て行く」「のんびり寮で過すこと」など，とに分けて検討したが，やはり一定の傾向はみられなかった。表は省略する。

4) 卒業への積極性　「早く学院を卒業して，現場で働きたいと思いますか。」（質問4）という問いに対する反応は，1年生時に最も積極的で，2年生時にやや消極的になり，3年生時には積極的な者と消極的な者への分極化の傾向がみとめられる（第7表）。

5) 好きな働き場所（就職先）　第2回調査および第3回調査で，「働く場所としてはどんなところが好きですか。」（質問5）と訊いたときの反応は，第8表の如くであった。1年生および2年生にみられる「国公立の大きな病院」以外へのバラつきが，3年生においては著しく「国公立の大きな病院」に集中してしまう傾向が注目される。

第7表　早く学院を卒業して、現場で働きたいと思いますか（質問4）

クラス	反　応	1年生時	2年生時	3年生時
B	1. 早く現場に出て働きたい		33.3%(7)	38.0%(8)
	2. …早くこの学院を卒業したい		52.5 (11)	42.9 (9)
	3. あまり早く卒業したくない		9.5 (2)	4.8 (1)
	4. できることならいつまでも学院に…		4.7 (1)	9.5 (2)
	無　答		——	4.8 (1)
	計		100.0 (21)	100.0 (21)
C	1. 早く現場に出て働きたい	38.1 (8)	30.0 (6)	40.0 (8)
	2. …早くこの学院を卒業したい	38.1 (8)	40.0 (8)	10.0 (2)
	3. あまり早く卒業したくない	19.1 (4)	20.0 (4)	30.0 (6)
	4. できることならいつまでも学院に…	4.7 (1)	5.0 (1)	20.0 (4)
	無　答	——	5.0 (1)	——
	計	100.0 (21)	100.0 (20)	100.0 (20)
D	1. 早く現場に出て働きたい	70.4 (19)	50.0 (13)〔59.3 (16)〕*	
	2. …早くこの学院を卒業したい	14.8 (4)	15.4 (4)〔22.2 (6)〕	
	3. あまり早く卒業したくない	14.8 (4)	34.6 (9)〔18.5 (5)〕	
	4. できることならいつまでも学院に…	0.0 (0)	0.0 (0)〔0.0 (0)〕	
	無　答	——	—— ——	
	計	100.0 (27)	100.0 (26)〔100.0 (27)〕	

＊〔　〕内はD_2'の資料

6) 親友の分布　これも第2回調査以後追加された項目（質問11）である。簡略を期するため第2回と第3回の調査結果を綜合して要点を示せば，第9表の如くである。1年生時の親友は学院外に多く学院内に少ないが，2年生時には学院内の親友がふえ学院外の親友が減ることによって学院内外の差は著しく縮まる。3年生では学院内の親友が再び減少し，学院外の親友はいくぶん増す。

7) 困った時の相談相手　これも第2回調査以後に追加された項目（質問12）であるが，親友の分布にみられた傾向，すなわち，1年生と3年生において学院外の比重が相対的に大きく，2年生において学院内の比重が大きいことがうかがえる（第10表）。

8) 月間の収入と支出　第2回調査以後，質問14および15を追加して，月平均の収入と支出を尋ねた。結果を学生1人当りの平均金額に要約して示せば第11表の如くであった。学年の上昇にともなって，収入も支出も（一部に若干の例外がみとめられるが）全般的に増大するが，収支の差額（残高）は2年生において少く，1年生と3年生

注8）質問23に対する回答はきわめて不正確であったので分析からはずした。その代りに数日学院の教務に依頼して，正確な時間数を算出してもらった。第12表がそれである。

第8表　働く場所としてはどんなところが好きですか（質問5）

調査	反応	1年生	2年生	3年生
Ⅱ	1. 国公立の大きな病院	59.2%(16)	75.0%(15)	81.0%(17)
	2. 国公立の小さな医療施設	18.5 (5)	10.0 (2)	0.0 (0)
	3. 私立の大きな病院	0.0 (0)	5.0 (1)	0.0 (0)
	4. 私立の小さな病院または医院	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
	5. その他	22.3 (6)	10.0 (2)	19.0 (4)
	計	100.0 (27)	100.0 (20)	100.0 (21)
Ⅲ	1. 国公立の大きな病院	63.7 (14)	77.0 (20)〔52.8 (21)〕*	85.0 (17)
	2. 国公立の小さな医療施設	9.1 (2)	15.4 (4)〔7.4 (2)〕	10.0 (2)
	3. 私立の大きな病院	9.1 (2)	3.8 (1)〔3.7 (1)〕	0.0 (0)
	4. 私立の小さな病院または医院	4.5 (1)	0.0 (0)〔0.0 (0)〕	0.0 (0)
	5. その他	13.6 (3)	3.8 (1)〔11.1 (3)〕	5.0 (1)
	計	100.0 (22)	100.0 (26)〔100.0 (27)〕	100.0 (20)

＊〔　〕内はD_2'の資料

第9表　親友の分布（質問19.調査Ⅱ,Ⅲの総合）

分布		1年生	2年生	3年生
院内に	いない	42.8%	19.6%〔29.6%〕*	41.5%
	いる	57.2%	80.4%〔70.4%〕	58.5%
	平均親友数（1人当り）	1.35人	1.51人〔1.48人〕	1.25人
院外に	いない	2.0%	8.7%〔14.8%〕	14.6%
	いる	98.0%	91.3%〔85.2%〕	85.4%
	平均親友数（1人当り）	4.17人	2.40人〔2.93人〕	3.29人

＊〔　〕内はD_2'の資料

第10表　個人的な問題で困つたことが起つたらまず誰に相談しまずか（質問12.調査Ⅱ,Ⅲの総合）

大分類	小分類	1年生		2年生		3年生	
学院内	同級生	11	13	15	17〔18〕*	15	15
	上級生	1		1		—	
	下級生	—		—		—	
	学院の先生	1		1		—	
親族	両親	17	22	11	18〔22〕	9	17
	兄弟姉妹	4		7		8	
	親類縁者	1		—		—	
その他	学院外の友人	14	16	5	7〔5〕	9	10
	学院外の先生	2		2		1	
不明	その他	—		2		1	
	無答	—		2		—	

＊〔　〕内はD_2の代わりにD_2'を用いて集計したもの

において多いのが特徴的である。

9）実習の時間数　第12表は学院の教務に依頼して，実際の実習時間を算定してもらったものである。上でみた「楽しいこと」のうち(b)のカテゴリーに入るものが3年生で増加するのは，この実習時間の増加にともなう疲れと，ほとんど一週間ごとに行われるテストの準備に追われることとさらに国家試験に対する不安とが重なって，「寝ること」や「食べて眠ること」を挙げる者が多くなることに因るものであることを指摘しておこう。

なお，先の横断的研究（6）において学年差がみられた「看護婦という職業のイメージ」（セマンティック・ディファレンシャル法による）および「寮生活の楽しさ，窮屈さ，有益さの評定」（質問17）には，今回の縦断的分析の結果，何らの一貫した学年差が見出せなかった。また「学院の講

第11表　月平均の収入、支出および残（質問14.15）

調　査		1年生	2年生	3年生
Ⅱ	収入	4.167円	4,200円	4,700円
	支出	3,619	4,032	4,333
	残	548	168	367
Ⅲ	収入	4,568	4,673〔4,863〕*	4,842
	支出	4,159	4,635〔4,685〕	4,368
	残	409	38〔　178〕	478

*〔　〕内はD_2'の資料

義全般に対する満足度」（質問8）「この学院の学生であることの誇り」（質問9），「学院内に見出せる尊敬できる人の数」（質問10）「看護婦になることへの積極性」（質問6および7），「家（郷里）へ帰る頻度」（質問13），「サークル（クラブ・部）への参加」（質問21），「学院外団体への加入」（質問22）には，いずれも一貫した学年差を見出すことができなかった。(注8)

第12表　病院実習時間数（学院の記録による）

年度	学年	時期	院内（当病院）	院外（他の病院）	計
昭39	1年生	4—9月	0		
		10—3月	175		
		計	175		
	2年生	4—9月	209		
		10—3月	518		
		計	727		
	3年生	4—9月	135	351*	486
		10—3月	275	245	520
		計	410	596	1006
昭40	1年生	4—9月	2		
		10—3月	156		
		計	158		
	2年生	4—9月	78		
		10—3月	488		
		計	566		
	3年生	4—9月	208	311	519
		10—3月	233	291	524
		計	441	602	1043
昭41	1年生	4—9月	0		
		10—3月	200		
		計	200		
	2年生	4—9月	111		
		10—3月	420		
		計	531		
	3年生	4—9月	183	300	483
		1—03月	232	261	493
		計	415	561	976

*　院外実習は3年生のみ、この場合実習配置表により前期に院外へ行く者と後期に行く者とに分かれるので、各年度とも出席番号1番の者を対象にして記入してある。

考　　察

はじめに，われわれが「クラスの規範」と呼ぶ potential return 曲線が，実際の罰則適用例とどれほどよく一致しているかを検討しておく必要があろう。この目的で作製したのが第13表である。調査の全期間（昭和39年4月から昭和42年3月まで）中，「第3度」の罰が適用された例は，わずかに3件（計4名）に過ぎない。いずれも午後12時すぎ（または2日後）である。この点は，先にみた曲線がいずれも12時以後の帰寮に第3度の罰を対応させていることとよく一致している。第2度および第1度の罰が適用された違反例は，それぞれ2例と6例であったが，遅刻の程度に関する記録が残されていないため，曲線のこの部分に関する裏づけはできなかった。ただ「問題になったが処罰にいたらなかった例」が6例ほど記録されていたことは，遅刻の程度は不明ながら，多少の遅刻は処罰を免れたという点で，われわれの曲線が第1度の罰以下のところにいくつかの目盛りをもっていることを正当化してくれるであろう。

第14表は時間外外出の件数であるが，「届出なし」の件数（25件）が先にみた違反例の総数（17件）より多いことは見過ごされた違反例があることを物語っている。このことは上でみた「処罰にいたらなかった違反例」と共に，フォーマルな規則（寮則細則における門限の規定）とそれの現実の適用との間に何がしかの距離があること，その意味では return potential model によって測定されたクラスの（インフォーマルな）規範の方が現実をよりよく表現していると言えよう。

次に，学年の推移による規範過程の変動が学院

注8）質問23に対する回答はきわめて不正確であることが判明したので分析からはずした。その代りに後日学院の教務係に依頼して正確な実習時間数を算出してもらった。第12表がそれである。

第13表　寮則細則に関する違反例（学院の記録による）

	第3度の罰が適用せられた例	第2度の罰が適用せられた例	第1度の罰が適用せられた例	問題になったが処罰に到らなかった例
違反者の学年 違反の事実 年月日，違反の内容 処罰の事実 年月日，内容，結果など	3年　39.4.19. 日曜の夜，外泊先（自宅）より帰寮せず問合せたところ電報にて2日後帰寮との返あり 寮長処罰　4.23. 教師面接　4.22. 家庭の事情等きく 3年　2名　39.5.6. 外出し連絡のないまま門限時間をすぎ12時頃帰寮する（ダンスパーティー） 寮長処罰　39.5.7. 教師面接　39.5.7. 両名とも父兄に連絡し来校していただいた 2年　41.12.11. 外出し連絡なし12時すぎ帰寮（海岸散歩） 寮長処罰 41.12.12. 教師面接 41.12.12. 訓戒	2年　40.7.23. 連絡ないまま門限すぎに帰寮部屋の者も知らない（花火大会にいっていた） 寮長処罰41.7.24. 3年　40.11.20. 遅刻*	2年　41.4.14. 春期休暇明けに帰寮せず自宅に電話にて問合せ事情をきく（セツルメントで離島にゆき台風のため連絡出来なかったとの事） 寮長処罰　41.4.14. 教師面接　41.4.14. 3年　40. 2.16. 遅刻 3年　41. 6.26. 〃 1年　41. 7. 2. 〃 3年　41. 9.12. 〃 2年　41.11. 6. 〃	1年 40. 6.25.遅刻 3年 41. 7.19. 〃 2年 41. 7.26. 〃 3年 41. 7.30. 〃 1年 41.10.24. 〃 2年 41.12.9. 〃

＊遅刻刻の事実は記録にあるが，内容等の記載がないもの。以下同じ。

生活の他の諸側面における変化とどのように関連するものであるかを考察してみたい。B1)～3)に指摘された傾向は，いずれも学年の上昇が，寮生活からの離脱を願望させる方向に作用する力を増大せしめていることを表わしている。またB4)～5)は，1年生の抱く将来の夢に関するロマンチシズムが，最終学年に入るとリアリズムに取って代られる事情を物語っているように思われる。さらにまたB6)～7)は，学生たちの準拠集団 reference group の推移を示しているものと言えよう。言葉を換えて言えば，所属集団であるクラスに対する準拠の度合の変化，すなわち，1年生時の相対的に低い準拠度から，2年生時の高い準拠度を経て，3年生で再び準拠度を低下させる過程が示されている。3年生におけるこの変化は，学院外実習がふえることによるところが大きいであろう。なぜなら，この実習は，学院から離れて過ごす時間がふえると同時に，クラス成員がバラバラで過ごす（科別に分かれて実習する）時間の増大をも意味するからである。B8）にみられる傾向が何を意味するかは必ずしも明瞭でないが，残高の学年推移は，クラスへの準拠度の推移と同型である点が注目される。もし現状に不安定さを感じるときは，将来に備えて収支の差額を大きく残そうとする，というような機制を仮定するならば，2年生は最も安定した時期と言えるかも知れない。いずれにしても，これらの変化が，A2）でみた規範過程の変動，とくにクラスの規範の水準移行およびそれらの規範の基礎の安定度（虚構度と結晶度が意味するもの）の変動と並行していることは興味深い。とくにクラスへの準拠度との対応は，理論的に解釈しやすい点であろう。すなわち，準拠度の最も高い2年生時に，最も厳しいクラスの規範が，最も小さい虚構度と最も高い結

第14表　時間外外出件数（学院の記録による）

年度	学年	時期	事前届出あり	事後届出あり	届出なし
昭39	1年生	4—9月*			
		10—3月	1		3
	2年生	4—9月	2		
		10—3月	1		4
	3年生	4—9月	4		2
		10—3月	1		2
昭40	1年生	4—9月	6		1
		10—3月	11		
	2年生	4—9月	16		
		10—3月	7		
	3年生	4—9月	8		
		10—3月	20		2
昭41	1年生	4—9月	1		1
		10—3月	21		1
	2年生	4—9月	8		4
		10—3月	33	6	3
	3年生	4—9月	10		2
		10—3月	7	2	

*昭39年度前期の資料が一部紛失していて記入不能

晶度をもって成立すること，1年生時の規範はそれへの接近過程であり，3年生時の規範はそれからの崩壊過程として位置づけられよう。とくに後者は，教育訓練を目的とする制度的集団が一般にそうであるように，所属終結期（卒業）をもつ集団—さらに言えば，所属終結（集団離脱）を目的とさえしている集団—がたどる多少とも必然的な経過だと見るべきであろう。

先の研究（**6**）でも指摘した通り，従来集団所属期間の増大が集団規範のより明確な認識と内在化をもたらすことに注目した研究はいくつかある（たとえば，**1**，**8**）が，もし所属期間の増大が所属終期への接近を意識させる場合には異る過程が進行することに注目した研究はないように思われる。ここには興味深い研究分野が残されているのではあるまいか。最後に，この種の規範過程の微視的分析に当って，return potential model がなかなか有用であることを指摘しておきたい。今回は推計学的検定を用いないことにしたので，規範の「構造特性」(注9) を敢て数量化しなかったが，必要に応じて種々の指数が算出できることを付言しておこう。

要約と結論

全寮制をとっている看護婦養成機関の3カ年にわたる在学生計113名を対象に3回の本調査とさらに1回の補足的調査を実施して，寮の門限に関するインフォーマルな規範，学院生活の諸側面に対する態度その他を測定した。門限に関する規範は return potential model を用いて分析し，継時的な比較を行うことによって，クラス集団の規範変動の経過を調べた。結果は次のように要約できる。

1．学生による寮の自主管理移行後，年を追って，クラス規範の学年差が縮小した。

2．学年の推移による規範の変動には一定の規則性がある。すなわち，(1) 1年生時相対的に最も寛やかな水準にあって，しかもなお過寛視されていたクラスの規範は，2年生時になって一段と厳しい水準へ移行し，同時に虚構度をいちじるしく減少させる。(2)相対的に厳しい水準にあって極小の虚構度に達した2年生時の規範は，3年生時において厳しさの水準にはほとんど変化をみせないが，虚構度は再び増大する。(3)規範の結晶度は，1年生から2年生へと高くなり，2年生から3年生にかけて再び低下する（これは虚構度の変化と軌を一にしている）。

3．規範の変動は，集団のよく一致した私的見解の変動に先導される。

これらの結果は，学院生活の他の諸側面に関する資料の示す学年的差異と結びつけて解釈された。とくにクラス規範の学年的推移による変動は，クラスに対する成員たちの準拠度の推移と対応させることによって，かなりよく説明される。

最後に，集団所属終結期への接近が集団の諸過程に及ぼす効果の解明は，今後の研究に俟つべきところの大きいことが指摘された。

注9）J. Jackson のいう structural characteristics of a norm. 詳しくは，Jackson（**3**）または佐々木（**5**）を参照せよ。

文　献

1 安藤延男　宗教的態度におよぼすリファレンス・グループの影響，**教社心研**，1960，**1**(1)，84—95.

2 Homans, G.C. *Social Behavior: Its elementary forms.* Harcourt, Brace & World, 1961.

3 Jackson, J. M. Structural chracteristics of norms. In G.E. Jensen (ed.) *Dynamics of Instructional Groups.* Univ. of Chicago Press, 1960.

4 Rommetveit, R. *Social Norms and Roles.* Univ. of Minnesota Press, 1955.

5 佐々木薫　集団規範の研究—概念の展開と方法論的吟味—**教社心研**，1963，**4**(1)，21—41.

6 佐々木薫　集団規範の研究(Ⅱ)—看護学院生の帰寮時刻に関する調査研究—**教社心研**，1965，**5**(1)，75—85.

7 Sherif, M. *The Psychology of Social Norms.* Harper, 1936.

8 Siegel, A., & Siegel, S. Reference groups, membership groups and attitude change. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1956, **55**, 360-364.

附録　アンケート形式 Ⅱ

昭和　年　月　日

1．「看護婦」という職業についてあなたがもっているイメージを答えて下さい。（あてはまると思うところの数字を○で囲んで下さい）

	非常に	かなり	やや	やや	かなり	非常に	
(イ)明るい	1	2	3	4	5	6	暗い
(ロ)重い	1	2	3	4	5	6	軽い
(ハ)あたたかい	1	2	3	4	5	6	つめたい
(ニ)強い	1	2	3	4	5	6	弱い
(ホ)楽しい	1	2	3	4	5	6	苦しい
(ヘ)かたい	1	2	3	4	5	6	やわらかい
(ト)新しい	1	2	3	4	5	6	古い
(チ)はで	1	2	3	4	5	6	じみ
(リ)円やか	1	2	3	4	5	6	角ばっている
(ヌ)自由な	1	2	3	4	5	6	窮くつな
(ル)単純な	1	2	3	4	5	6	複雑な
(ヲ)高い	1	2	3	4	5	6	低い

2．今の生活で一番楽しいことはどんなことですか。

3．一番つらいと思うのはどんなことですか。

4．早く学院を卒業して，現場で働きたいと思いますか

1．早く現場に出て働きたい。

2．現場で働くかどうかはともかくとして，早くこの学院を卒業したい。

3．あまり早く卒業したくない。

4．できることならいつまでも学院に残っていたい。

5．働く場所としてはどんなところが好きですか。

1．国公立の大きな病院

2．国公立の小さな医療施設

3．私立の大きな病院

4．私立の小さな病院または医院

5．その他（　　）

6．もし誰かが将来何になろうかと迷っているとしたらあなたはその人に看護婦になることをすすめますか。

1．すすめる

2．すすめない

7．あなた自身，看護婦以外の何かになりたいと思いますか。

1．思う→それは何ですか（　　）

2．思わない

8．全般的にみて，学院の講義には満足していますか。

1．非常に満足している

2．かなり満足している

3．まあまあというところ

4．どちらかといえば不満である

5．非常に不満である

不満の理由は：

{　　}

9．あなたはこの学院の学生であることに誇りを感じますか。

1．非常に大きな誇りを感じている。

2．かなり大きな誇りを感じている。

3．いくらか誇りを感じている。

4．誇りなどほとんど感じない。

5．むしろ肩身のせまい思いをしている。

{何か理由がありますか：　　}

10．年令の上下を問わず，あなたが尊敬できる人は，この学院内に何人ぐらいいますか。（　　）人くらい

11．あなたが自分の親友と考えている人々は学院の内外にどれくらいいますか。

学院内の
- 上級生の中に（　　）人
- 同級生の中に（　　）人
- 下級生の中に（　　）人
- その他に（　　）人

学院外の
- 年長者に（　　）人
- 同年者に（　　）人
- 年少者に（　　）人

12．個人的な問題で困ったことが起ったら，まず誰に相談しますか，（1つだけ○で囲んで下さい）

1．同級生　2．上級生　3．下級生　4．学院の先生
5．両親　6．兄弟姉妹　7．親類縁者　8．学院外の友人
9．学院外の先生　10．その他（　　）

13．どれくらい頻繁に家（郷里）へ帰りますか。

平均して（　）カ月に（　）回くらい

14．毎月平均の出費はいくらぐらいになりますか。

月平均（　　）円くらい

15．そのための収入をどうして得ていますか。

家からの仕送り	（　　）	円
自分の貯金から	（　　）	円
アルバイトして	（　　）	円
その他〔　　〕	（　　）	円
〔　　〕	（　　）	円
計	（　　）	円

16．学院の全寮制〔学生は全員寮に入らなければならないという制度〕についてどう思いますか。

1．全寮制がよい。
2．特に通学を希望する者以外なるべく寮に入れたがよい。
3．通学が困難な者にだけ寮を提供するのがよい。

17．寮生活についてどう思いますか。

	非常に	かなり	いくらか	あまりない	全然ない
(イ)楽しい	1	2	3	4	5
(ロ)窮くつだ	1	2	3	4	5
(ハ)有益だ	1	2	3	4	5

18．もしあなたのクラスの人が平日無断で外出し，次のような時刻に帰って来たとしたら，どの程度の罰を与えるのが適当だと思いますか。ただし罰の程度は，

第1度　補食室当番
第2度　補食室当番＋清掃当番
第3度　第2度＋補食室当番1週間

とする（寮則細則第40第）

午后9時15分に帰った場合	→0．罰しない	1．第1度	2．第2度	3．第3度
〃　30分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃　45分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃10時00分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃　30分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃11時00分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃　30分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃12時00分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃12時を過ぎて〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃

19．このことについてあなたのクラスの他の人たちはどう思っているでしょうか。（クラス全体を考えて，もっとも多くの人が答えるだろうと思われるところ）

午后9時15分に帰った場合	→0．罰しない	1．第1度	2 第2度	3．第3度
〃　30分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃　45分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃10時00分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃　30分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃11時00分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃　30分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃12時00分〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃
〃12時を過ぎて〃	→0．〃	1．〃	2．〃	3．〃

20．寮はうまく運営されていると思いますか。

1．非常にうまく運営されている
2．かなりうまく運営されている
3．まあまあというところ
4．どうもまずく運営されている
5．非常にまずく運営されている
→どういう点ですか：どうしたらよいと思いますか：

21．学院内であなたはサークル（クラブ・部）に参加していますか。

1．何にも参加していない
2．参加している→（　）（　）（　）

22．学院外であなたは何かの団体に加入していますか。

1．何にも加入していない
2．加入している→（　）（　）

23．看護婦の実習はどれほど経験しましたか（1年生に入学して以来通算して）約（　）日くらい

24．あなたの学年：（　）年生

25．あなたの出身高校：1．福岡市内　2．福岡市外福岡県内　3．その他（　）県

高校卒業年月：昭和（　）年3月

26．あなたの家で中心になっている人の職業：

イ，新聞雑誌の記者・編集者　ロ，法律家　ハ，教員　ニ，技師　ホ，外交官　ヘ，行政官　ト，宗教家　チ，幹部社員　リ，上級公務員　ヌ，医師　ル，薬剤師　オ，看護婦　ワ，会社員　カ，銀行員　ヨ，販売業（商店）　タ，写真屋　レ，巡査　ソ，機械工　ツ，仕立屋　ネ，飲食店（経営・料理人）ナ，手芸家　ラ，芸能職　ム，理髪業　ウ，船員　キ，左官　ノ，石工　ヲ，守衛　ク，消防士　ヤ，雑役夫　マ，大工　ケ，店員　フ，漁業　コ，人夫　エ，農業　テ，職人　ア，労務者　サ，その他（　）